
目次

秘密	2
陷落	22
洗脑	40

秘密

「秀斗、このことはふたりきりの秘密ね、お母さんにもお父さんにも言っちゃだめだよ」

「兄ちゃんと、ふたりの？」

「うん、僕と秀斗の秘密」

幼い頃にした双子の兄との会話を、よく覚えている。

俺たちの間に存在したふたりきりの秘密はたくさんあった。母親が隠していたであろうお菓子を盗み食いたこととか、近所に秘密基地を作ったこと、双子で入れ替わって人を騙してみたり。今になって考えると、どれも可愛いものばかりだったけれど。

誰にでも優しく、少しだけ鈍臭くて、でも何事にも前向きに取り組んでいて、いつでも俺の前をいこうとするけれど、なんだかんだで隣を一緒に歩いてくれる兄の優斗。

比較的器用で、誰よりも飲み込みが早くて、何をやってもそれなりに上手にこなしてきた弟の俺、秀斗。

小さい頃は、それでバランスが取れていた。幸運にも、両親は自分達に優劣をつけることをしなかった。それぞれが得意なことを積極的に褒めて伸ばして、

なにか壁にぶつかることがあっても、お互いに補って生きていけばいい。そんな考えをする両親の元で、俺たちは育てられた。

幼少期から小学生にかけてまではそれでも良かった。しかし、中学生に上がる頃には、ふたりの能力差は如実に現れはじめた。

それは、俺たち双子の関係性のバランスが、ゆっくりと崩れ始めたタイミングだった。

どんな相手にも分け隔てなく優しく、何事にも前向きに取り組んで、日々努力を欠かさない。結果的に、学業もスポーツも全てを完璧にこなして、誰からも認められている兄の優位。

何をやってもそれなりにこなしてきたからこそ、大した努力をせずに成長してしまつて、兄をはじめとする周囲の人間にも色々な分野で次々と抜かされていき、平凡もしくはそれよりも劣つて、なにも結果を残すことが出来ない弟。

高校生になる頃には、そんなアンバランスな双子が出来上がつてしまつたのであつた。

出来の差がついてしまつた兄とは、不幸にも同じ高校に通っている。

小学生の頃、一緒に私立中学受験をし、揃つて同じ男子校に進学したのだ。中高一貫校であるため、少なくとも高校を卒業するまでは、同じ場所で過ごさなければならなかつた。

同じ学校に通っているからこそ、兄の評判や情報は勝手に入ってくる。「優斗は優しいよな」「勉強教えてもらったけどわかりやすかった」「アイツは絶対モテる」とか、あとは「可愛い」なんていうよくわからないものまで、実にさまざまである。

嫉妬とまではいかないが、自然に自分と比べられているような感覚が嫌で仕方がなかった。俺たちが双子であることを、学校中の人間全員が知っているとなっていて、その関係性を隠したいようなそんな思いがあつて、高校生になつてからは特に、兄との会話は減つていた。

俺の気持ちを知つてか知らずか、学校で兄が話しかけてくることもなくなつた。一緒に通っている塾や、家の中ではふつうに声をかけてくる。もちろんそのときは、ふつうに会話をする。

険悪というわけではないが、微妙な空気感が俺たち双子の間には漂つていた。

事情によりふたり一緒に通っている塾は、いくつかのコースに分かれており、兄とは異なるクラスに通っていた。当然、兄は一番上のクラスで、俺は下の方に属するクラス。その辺りでも、大きな差が生まれている。

ある日、必要なテキストを忘れてしまったことに気が付いて、次のコマに同じ科目を取っていたはずの兄に借りようと、別フロアにあるクラスに向かったのだが――

「優斗くん、少し前から金曜日は来てないよ」

「あ、そうなんだ……ありがとう」

塾前後で、兄と会話をしているのを何度か見かけたことがある、クラスの生徒にそんな風に教えられる。

塾の曜日を変えた、もしくはは一日減らしたことは、全く知らなかった。それどころか、ここ最近の金曜日の夜を思い出してみると、ふつうに塾帰りのテンションで帰宅してきている印象だった。自宅に到着する時間的には、今までとあまり変わらない。学校と塾が終わって、二十二時頃だろうか。

その日、帰宅してすぐ母親に聞いてみた。

「あれ、秀ってば聞いてなかったの？　なんかね、もう少し自習時間メインにしたいから図書館行くって言ってて、金曜日だけ解約したのよ」

「へえ」

支度をしておいてくれた夕飯をありがたくいただいていると、タイミング良く兄が帰宅した。

「おかえり優、塾のことと言ってなかったの？」

「うん、言う機会なくて、なんかごめんね秀斗」

「別にいいけど……優斗どこで自習してんの？」

「図書館」

「学校の近くの？」

「うん」

即答する優斗の様子に、なぜだか違和感を覚えた。どのあたりかと問われると、うまく説明出来ない。それでも、いつもの優斗と雰囲気違ったのだ。

母親が兄の分の夕飯を温め直している間に、ささつとスマートフォンをいじる。兄が口にした、学校の近くにある図書館を検索するためだった。

たしかにあそこは毎日夜遅くまで開館しているが、たしか――

画面に表示された内容を見て、やっぱりなと思った。学校近くの図書館は、毎週金曜日は書架整理のために午後は休館になっているのだ。つまり、兄が嘘をついていたということになる。それならば、兄はどこで過ごしていたのだろうか。ファーストフードとかカフェとか、いくらでも選択肢はある。でも、それならば嘘をつく必要なんてない。

兄が隠しているであろう秘密が、どうも気になって仕方がない。

翌週の金曜日、予定していた塾の欠席連絡を入れて、学校帰りの兄を尾行した。その際に知れたことはいくつかある。

尋ねたときに口にしていた、学校から歩いて行ける範囲にある図書館ではなく、電車に乗って都心部までわざわざ出ていること。さらに、移動先の駅構内

で着替えをし、制服ではなく私服で出かけていること。さらに、高校生が気軽に入れるような店が立ち並ぶメイン通りではなく、ひっそりとしている裏路地に用事があるらしいということ。

結果的に、兄は図書館になど行っていないなかった。

その日は、兄のことを見失ってしまったのと、学生の気配が微塵も感じられない路地を制服姿で歩いていることが悪目立ちし、諦めて帰宅することにした。そしてさらに翌週、わざわざ学校鞆に私服を入れていって、再度兄の後をつけた。手早く着替えも済ませて、兄のことを見失わないように適度な距離を守って着いていく。

兄が入っていったのは、真新しいテナントビルだった。扉を入れてすぐに階段を下りていく兄の姿を確認してから、恐る恐るビルの入口に近付いていく。扉脇には、地下一階から五階までの中に入っている企業のプレートが掲げられており、知らない企業名がずらずらと並んでいる。

階段を下っていくところを見たため、兄の行き先は間違いなく地下一階だった。しかし、肝心のその部分にはプレートが出されていない。企業が入っているというわけではないのだろうか。ひとまず、そのビルに入っている企業名や住所などで検索をかけていく。しかし、地下一階にあるであろう何らかの情報は一切出てこない。

せつかくここまで来たのに、どうするか。気になるけど、でも――

「こんにちは……あれ、キミ」

「……っ！」

スマートフォン片手に俯いているところで、突然ぽんつと肩を叩かれて、飛び上がる勢いで後ろを振り向く。

自分よりも少し歳上、大学生くらいだろうか。好青年風の男が立っていた。声をかけられたものの、咄嗟に声を発することが出来ずに、しばらく無言の間が続く。そして、少しすると「驚かせてごめんね」と男が申し訳なさそうに言ってきた、こちらも同様に謝った。

「入らないの？」

「あ、えつと……」

「あれ、もしかして来るの初めて？」

「……はい、そんな感じですよ」

「ふーん……そっか、良かったら一緒に入る？」

そう言われると、返答に詰まった。なんなのかわからない空間に足を踏み入れていいのだろうか。ちょっと怖い気持ちもあるけれど、兄も行ってるわけだから、悩む必要なんてないのかもしれないが。

ちらりと男を見上げると、にこりと微笑みかけられる。その表情を見て、俺は恐る恐る頷き返した。

「マスクか眼鏡持つてる？ あるならしておいた方がいいかも」

なんでも思いつつも、鞆の中に入っているマスクの存在を思い出し、素直に従った。潜入することが兄にバレないためにも、好都合だ。

かつかつと足音を立てて階段を下りていく男の後を、静かに着いていく。ワシフロア分下りると、重厚感溢れる真っ赤な扉が現れた。コンコンコンと男がノックした後、扉が開かれる。

中から顔を覗かせた男に「どうぞ」と言われると、突然足がすくんだ。暗幕で隠されていて、扉の奥の向こう側がよく見えないことだったり、この異様な空気感、今なら引き返すことだって出来るだろう。少しだけ悩んでから、男の後を追って、部屋に足を踏み入れて暗幕をくぐる。

よくわからない空間だが、兄が入っていったのだから、まあ大丈夫だろうという思いがあったのと、あとはやっぱり、どうしても兄の秘密を知りたかった。

「あ、ちょうど始まるタイミングみたいだけど……なるほど、やっぱりね」
「……………」

「今日が初めてならせつかくだし、一緒に一番前座ろうよ」

奥へと進んでいった先、部屋の中には小さなステージがあった。そのステージを囲むように、半円状に椅子が用意されているつくり。小劇場的なものなのだろうか。俺たち以外にも人がいて、座席はそれなりに埋まっていた。周囲を見回して、兄の姿を探す。

男に手を引かれるまま、ステージのすぐ目の前の座席に連れていかれる。腰をかけてからも、横や後ろなど客席をひと通り探してみたが、兄の姿はなかなか見つからない。

少しすると、客席の明かりが消えて、ステージがぱつと照らされた。兄を探すことを中断し、緊張しながら前を向いていると、カラカラとタイヤが回る音が聞こえてくる。途端に周囲から、わつと歓声が上がった。

タイヤの音が近付いてきて、すぐ脇を通ってステージに上がったそれを見て、悲鳴を上げそうになった。

パイプで作られた枠にぶら下がっているブランコ、そこに全裸の男が腰掛けていたのだ。目隠しをつけて、両手は頭上で拘束されており、ブランコにただ座っているだけでなく、膝裏にもバンドのようなものがかけられて、M字開脚の形で吊り下げられていた。

その姿の衝撃もなかなかだったが、そこに吊られていた裸の男が、どこからどう見ても兄だったから驚いた。目隠しをしても顔の作りや髪型などでわかる、そこにいるのは間違いなく兄だ。

「皆さま、お越しいただきありがとうございます。今宵もきつと、素晴らしいショーになるでしょう。本日は、大好評だった現役学生くんに来てもらいました。彼は生粋のDMでいじめられたがりですからね、皆様の視線や発声で、存分に可愛がってあげてくださいね」